



テクニカル ダイアリー



令和2年産の振り返り

今年は、3月の低温と日照不足に加えて、4月中旬の暴風雨により倒伏が発生しました。乾燥が激しい一部の圃場では、収穫時期を迎えると樹勢を維持できず、収量が大きく落ち込みました。保水性の良い圃場や水を与えた圃場では増収傾向でしたが、倒伏の影響で品質が低下しました。

狭める(目安は50〜55センチ)、テープを張る位置を高めにすることで、工夫をしてください。また、被覆除去が早いと強風の影響を受けやすいので、トンネルサイドの被覆は、頭上換気後、天候が安定してから除去しましょう(被覆除去が遅れると花落ちにつながるので注意)(写真①)。



写真① 強風時の様子(4月13日)

次年度対策

●倒伏軽減策と圃場の選定
および定期的な灌水

開花期以降の乾燥は、結実や莢の充実不足を招くため、保水性の良い圃場を選定するか、定期的に灌水する(例…通路灌水などの対策が必要です。倒伏対策としては、トンネル支柱間にナイロンテープを張るのが一般的ですが、さらにトンネルの間隔を

●えそモザイク病
ソラマメ病害虫防除

土壌伝染性のウイルス病で、感染すると株が萎縮し、葉や莢にえそ症状が出るのが特徴です。早期に発病すると生育が止まり、収穫に至らないこともあります。対策としては、①連作を避ける、②水はけの良い圃場を選ぶ、

③ウイルス病と思われる症状が確認された圃場では発病株を抜き取る、④トラクターなどを使用する管理作業は最後に行い、土壌を他の圃場に持ち込まない、⑤堆肥などを投入し土壌の改善を行う、の5つが挙げられます。また、ウイルス病の発生を軽減させるためにも**定植の45日前までに**、バスアミド微粒剤(10リットル当たり30センチの散布をお勧めします)。

●ネキリムシ

近年、ネキリムシが多発傾向にあります。幼苗期に茎を食害され、枯死して欠株となり減収します。生育初期にガードベイトA(10リットル当たり3センチを株元散布しましょう。土壌消毒も選択できますが、ここでは手軽に使用できる薬剤散布をお勧めします)。

●アブラムシ類

アブラムシは、トンネル被覆内や暖冬で気温が高い状態では、活動が続きます。生長点に生息し、葉や茎の汁を吸うため、株の生長が止まります(写真②)。定植時はアドマイヤー1粒剤を処理して発生を予防し、多発する前に防除しましょう(表①参照)。

表① アブラムシの防除薬剤

薬剤名	使用量・希釈倍率	使用時期	使用回数
アドマイヤー1粒剤	2g/植穴 (ただし、6kg/10aまで)	定植時	1回以内
アディオン乳剤	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	収穫7日前まで	3回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫3日前まで	3回以内



写真② ソラマメのアブラムシ被害

ジャンボタニシ・雑草防除は稲刈り後から!

年々増加しているジャンボタニシ(正式名: スクミリンゴガイ)や、難防除雑草のオモダカ、クログワイは、春の田植え後に発生してからでは防除しきれません。秋の稲刈り後から対策をして、翌年の発生密度を減らしておくことが重要です。



写真③ ジャンボタニシ(成貝)

ジャンボタニシ対策

ジャンボタニシ(写真③)は秋の水温低下や落水とともに土中に潜り、翌春まで越冬します。そのまま放置した場合、翌年の発生密度はさらに高まり、薬剤防

除だけでは対処できなくなります。そのため、越冬数を減らす対策が重要です。

対策① 石灰窒素の散布

(※稲刈り後に湛水可能な圃場に限り)

水温15℃以上の時期(9〜10月)に湛水することで、ジャンボタニシが土中から出てきて活動し始めます。そのときに石灰窒素を散布し、死滅させます(図①)。

対策② 早期の稲わらのすき込み

翌春まで稲わらを残しておく、その下が保温されるため、ジャンボタニシが越冬しやすくなります。できるだけ早く稲わらをすき込むことで、越冬場所を減らしましょう。分解促進材(わらゴールド、アグリ革命など)を使用すると効果的です。

対策③ 厳寒期に数回耕うん

厳寒期に丁寧に耕うん(走行速度は遅く、回転数は速く)し、越冬中の貝を物理的に破壊します。また、寒さにあてることによって殺菌します。これら

①湛水状態を3〜4日続ける



②貝が出てきたら、石灰窒素を10a当たり20〜30kg散布する



③湛水状態で5〜6日放置する



④自然減水させる
(石灰窒素は魚毒性があるので漏水に注意する)



図① 石灰窒素による防除

難防除雑草対策

を複数回行い、翌春の発生密度を低下させます。

多年生雑草のオモダカ(写真④)とクログワイは、稲刈り後の9月下旬から11月上旬に塊茎を形成し、翌年に再び発生します。田植え時の一発処理除草剤だけに頼らず、秋から冬期にも対策しましょう。

①稲刈り後、早めに地下部まで枯らす茎葉処理除草剤(ラウンドアップマックスロードやタッチダウンIQなど)を散布し、塊茎形成を阻害する。

②秋期の耕うんにより塊茎を地表面に出し、冬の乾燥により枯死させる。

「営農情報メール」配信中!

作柄情報、病害虫対策、青果物概況、イベント案内など、営農に役立つ最新情報をお届けします。



←登録はこちらから(登録無料)

JA山武郡市の組合員ならどなたでも登録できます。



写真④ 稲刈り後開花しているオモダカ(地下部では塊茎を形成し始める)

8月の分析経過について 残留農薬分析点数・・・8月は実施なし 土壌診断点数・・・合計35点